布爾とあり、粉錫は今京おしろいと呼て、婦人の顔に塗るものなり、去からば粉は水銀粉にて、今はらやとも、伊勢おしろいとも呼ぶもの是なり、もしは物異なれども、はらやといふ名は、巴布爾を訛り呼べるにや知べからず、孔志約が唐新本草の序を作りて、鉛錫無辨とは、陶弘景が非を斥したる辭なり、弘景だにさる事あり、ましてこゝには、誤稱もあるべきなり、

〔重修本草綱目啓蒙四金〕粉錫　京オシロヒ

一名白膏酉陽雜俎　流丹白膏同上　流丹石藥爾雅　丹地黃同上　鉛英事物異名　塗坯同上　粉心同上　五花直同上

杭粉外科正宗、杭州者上品、　朝粉天工開物

一名胡粉、京オシロヒノコト也、鉛ヲ薄ク片ニシ、錯ニテ蒸シテ採ル、數度蒸シトレバ鉛漸々ニ減ズ、畫家ニ用ルゴフンハ蛤粉也、胡粉ニ非ズ混ズベカラズ、又チヤンヌリノ白色ナルハ、京オシロヒヲ入ル、茶碗ノ白藥ニハ、豐後玖珠郡ノ白土ヲ用ユ、燒テ白色變ゼズ、モシ京オシロヒヲ用ユレバ、燒テ赤クナル、何ントナレバ、燒ケバ丹ニナルユヘナリ、〇略中

增、和俗單ニ白粉ト呼テ、婦人面色ヲ粧モノナリ、

〔雍州府志七土產〕白粉　凡製白粉者、入水銀於釜燒之、故其本家謂釜本、所々雖有之、不及洛陽之製、故稱京白粉、其中袖岡越中某所燒爲洛陽第一、禁裏院中女子專用之、

〔日本書紀通證三十五持統〕水銀粉、和名波良夜、俗云伊勢於志呂伊、出勢州射和爲精品、

〔胸算用一〕伊勢海老は春の紅葉

毎年大夫殿から御拂箱に、鰹節一連、はらや一箱、〇略下

〔春色梅兒譽美七〕十四齣

仙女香とおしろいを手にもちしふり袖しんぞう青梅　青めなみ女娘とふちよつと來な、十才ばかりの禿かむろ　禿なんざいます

ヱトきたる　青アノおめへ、この白粉をやるから、毎日顔へすりこみな、そうすると、此おしろい